

NPO法人京田辺シュタイナー学校
校舎がついに完成しました！



京田辺シュタイナー学校の第二期校舎工事が終了し、ついに校舎が完成しました。高学年の教室もでき、職員室も広がって先生方も嬉しそうです。今回、校舎の設計を担当された伊藤壽浩さんに、誌上校舎見学ツアーをお願いしました。では、先生や親御さんたちがセルフビルドでつくりあげた真新しい校舎を覗いてみましょう。

子どもの内面の発達とともに 成長する建築

伊藤壽浩(京田辺シュタイナー学校校舎設計)

この学校で12年間過ごす子どもたちに、その時期に見合った教育を与えること——このシュタイナー学校の基本理念に相應しい建物とはどのようなものなのでしょう？ 小さな子どもには、きっと優しく包み込む空間が必要でしょうが、その中で思春期の子どもを学ばせようとは誰も考えないでしょう。「各学年に応じて成長する教室」が、この建物のひとつのテーマでした。

建築は、人間に最も近い「環境」でありながら、日常、意識されることは稀です。しかし、意識されないということは、私たちに無防備に働きかける、より直接的な影響力を持つと言う事に他なりません。

内部を包む天である天井は、その中にいる人と世界との関係を規定づけると考えています。建築の歴史を見れば、天井というものが、私たちが慣れ親しんでいるように、いつもフラットであった訳ではないことが分かります。

フォルムと色彩が寄り添う教室

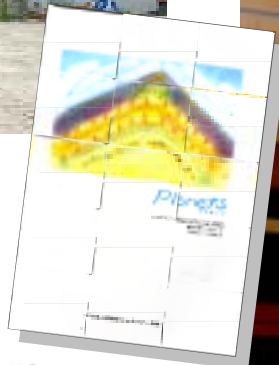
まどろむように、世界との一体性の中に過ごす一年生の教室の天井は、丸いドームのように、そして、淡い薔薇色を塗りました。楽園から出て、次第に世界との関係を築いてゆく子どもたちを包み込む天井も、その色彩と共に変化します。やがて迎える思春期、内面へと沈潜する一方で、未知の世界へと惹かれて行くこの時期には、子どもを包む天井も、外と内という二つの世界に分かれたような形状を採り、暖色と寒色を混合した緑色に塗られています。自己と世界との分離をはたし、世界と新たな関係を結んで行く子どもたちを包む天井は、最終学年に向けて再び一体感を取り戻して行きます。しかしそれは、与えら

建築空間が子どもたちに与える影響には想像以上のものがあります。あるオイリュトミストは、シュタイナー建築の部屋を借りてクラスを開いたら子どもたちがとても落ち着いたので驚かされた、と言っていました。京田辺の校舎建築では、予算や敷地形状の制約から教室の「成長」はもっぱら天井の形状と色彩に限定されたとのこと。もしもその余裕があったとしたら、教室の間取り全体が学年ごとに大きくかたちを変えていくように設計されただろうとのこと。



もっと知りたい方に……会報誌『Planets』(年4回発行)
同校が発行している雑誌『Planets』には、京田辺シュタイナー学校の活動の紹介が掲載されています。バックナンバーには、伊藤壽浩さんによる校舎のより詳しい紹介があります。シュタイナー建築に関心がある方には第一級の資料です。

会報誌『Planets』問い合わせ先
NPO法人京田辺シュタイナー学校「友の会」
〒610-0332 京都府京田辺市興戸南鋒立94
Fax 0774-64-3334 (24時間受付)



としひろ
伊藤壽浩さん：設計事務所勤務の後、渡独。キリスト者共同体自由大学等に学ぶ。設計業務の傍ら京田辺シュタイナー学校で宗教の授業を担当。代表的な建築作品に夢窓幼稚園(京都市)等がある。

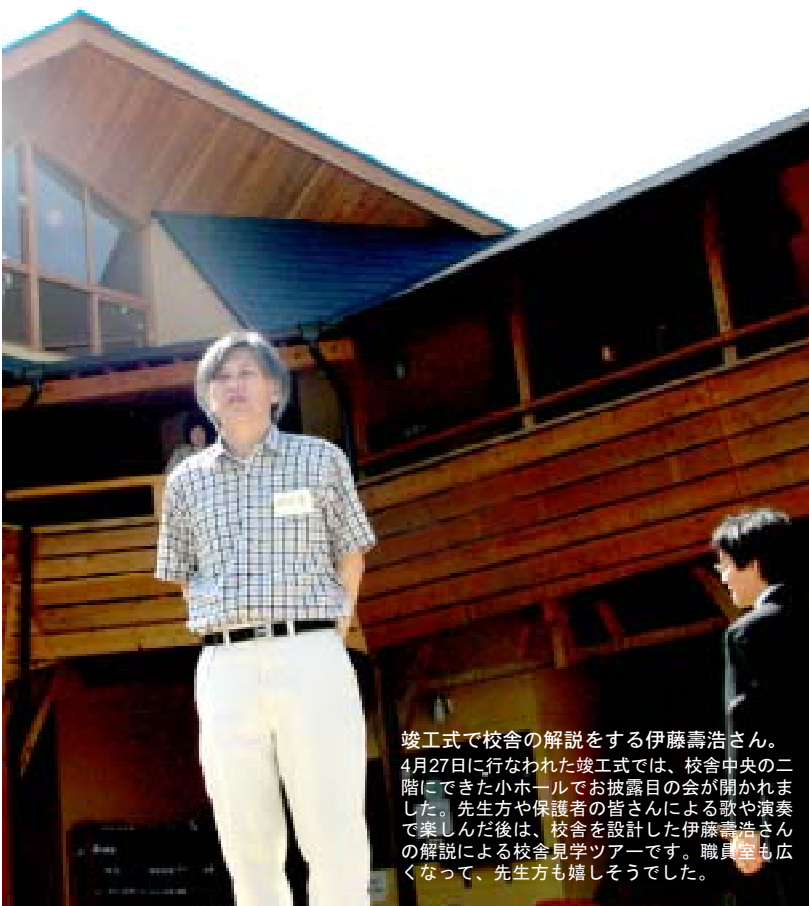
れた一体感ではなく、自立を果たした後、自らの手で掴み取った世界との新しい関係がもたらした一体性です。この天井には暖色と寒色とのもうひとつの(高貴な)混合である紫(藤色)が塗られています。

内部と外部が呼吸し合うように…

この建物のもうひとつのテーマは内外の関係でした。この教育が目指している「自由な人格」の形成には内面化が不可欠です。しかし厳しい自然の中であって、自らを閉ざすことが建物の基本条件である西洋ではあたりまえの「閉ざされた内部空間で、内面世界を形成する」あり方が、自然との一体感を目指してきたこの国でも、そのまま成立するのでしょうか？ この国では、豊かな自然との関わりにも、目を向けて行く必要があるのではないのでしょうか。

ここでは、人間の最も内側の部分を育てる内部空間と、私たちにとって「外部」である自然という、ふたつの極を、しなやかに連続させることができないか、と考えました——内部空間をフォルムや色彩によって活性化させることで開く一方で、外部に積極的に採り入れた池や東屋、築山や柵といった手を加えられた要素を、外部通路や外部階段、縁側といった中間領域が緩やかにつなぐ。反復する列柱やそのモチーフが繰り返すリズムの中で、また子ども達を包み込むように覆っていた屋根が次第に反転し、自らを世界に開き、そして再び閉じる仕草の中で、内部と外部が「呼吸」を始める——こうした中で、内部が閉じながら開くような、外部と柔らかにつながって行くような、そんな場所が生まれることを願って設計しました。

<http://school.kyotanabe-steiner.jp/>



竣工式で校舎の解説をする伊藤壽浩さん。
4月27日に行なわれた竣工式では、校舎中央の二階にできた小ホールでお披露目の会が開かれました。先生方や保護者の皆さんによる歌や演奏で楽しんだ後は、校舎を設計した伊藤壽浩さんの解説による校舎見学ツアーです。職員室も広くなって、先生方も嬉しそうでした。



不定期連載第18回

子育てコラム

こどもの時間 おとなの時間

吉田登志子
Toshiko Yoshida

横浜の親子サークル「竹の子の会」に二児を通わせる母親を経て、同会スタッフを経験。最近独立し、人形づくりの講習を始めました。実際の子育ての体験に基づいた、ほっと肩の力がぬける「子育ての知恵」をそっと伝授。

危機と転機

自分が小学校5、6年の頃、毎日泥だらけで夕方帰ってくる弟や妹をうらやましく思っていた時期があります。くもの巣を体中にくっつけて帰ってきたり、雨もいとわず外で遊んでくる弟妹たち。長女としてまじめで快活な役割を演じてきたような気がして、伸びやかに生きたいなあと感じたことを今でも覚えています。

自分が子育てを始めたときもよくそれを思い出して、のびのび育てたいといつも思っていました。その思いがシュタイナー教育を学ぶという「竹の子の会」に出会わせたのでしょう。ゆったりしていて一貫性のある態度の先生に感心したり、シュタイナーの人間観に感動したりの連続で、母親同士のよい仲間もでき、いろいろなことを教わりました。子どもたちも一緒に遊べるたくさん友だちができました。母親仲間からすすめられてたくさん本にも出会い、夢中で読みました。しかし、数年経つうちになぜか息苦しさを感じるものが多くなった自分に気づき始めました。

きっと自分で自分を縛り始めていたのですね。「こうしなければならない」という制約を知らず知らずにつくって苦しくなったり、周囲の目を気にしたり、それはひどいものでした。そんなとき、会にひとりのお母さんが入ってきました。穏やかで謙虚なのに、自分の子育てをはっきり主張できる力強さも備えている人でした。彼女は遠慮しながらも、よその会のよさを紹介できる度量の持ち主でした。当時の私には、「竹の子」のなかで別の会のことを話題にするなど、考えられなかったのです。彼女に会って、「のびのび育てたい」という夢からどんどん遠ざかっている自分を実感し、彼女とのつきあいのなかでふたたび楽になっていく自分を感じる事ができました。

シュタイナー教育はりっぱな権威で、本物で、だからそれに基づく活動もいちばん正しくて、他は違うんだという独断に陥っていたのだと思います。私はシュタイナー教育という言葉に寄りかかり、自ら閉ざしてしまっただけですね。それから「竹の子の会」だけではなく、同じような方向をめざす人との出会いがどんどん増えてきて、シュタイナーの学びも自分のなかでもっと創造的で自由になったと思います。転機を運んでくれた彼女との出会いに感謝しています。